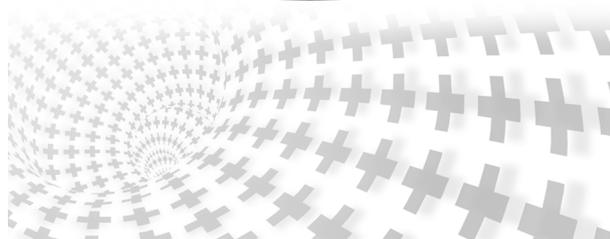


こんにちは



東京理科大学薬学部薬学科 中村研究室を訪ねて

〈はじめに〉

去る4月25日、本誌の元編集委員・小池茂行氏（首都大学東京客員研究員）と共に、東京理科大学薬学部薬学科の中村研究室を訪問した。薬学部が設置されている野田キャンパスは、東武野田線運河駅で下車し、駅名の由来となっている利根運河の方向へ歩を進めると、その対岸に広大で緑豊かなキャンパスが広がっている。約44万m²の広大な敷地を誇る野田キャンパスには、理工学部や基礎工学部などが設置されており、薬学部はキャンパスの最北端に位置している。薬学部の建物は、講堂などがある13号館、講義棟である14号館、研究棟である15号館から成っており、目指す中村研究室は15号館の4階にある。教授室のドアをノックすると、中村先生が暖かく私達を迎え入れてくれた。私達は、教授室で中村先生から研究室の説明を受けた後、実験室と分析科学センターを見学させていただき、最後に研究室の学生さんへのインタビューを行った。

〈薬学部の紹介〉

東京理科大学の薬学部は、昭和35年（1960年）に創立され、理科大の中でも理学部に次いで、長い歴史を持つ学部である。平成15年（2003年）に薬学部は神楽坂から野田キャンパスへ移転し、生命科学研究センターやゲノム創薬研究センターなどと連携して、ファーマコインフォマティクス（創薬情報科学）の一大拠点を形成している。そして、平成18年4月には薬学教育制度の変化を受けて、6年制の薬学科と4年制の生命創薬科学科の2学科に再編成され、現在に至っている。

二つの学科について少し説明すると、6年制の薬学科では「ヒューマニズムと研究心にあふれた高度な薬剤師の養成」を目指している。そのため、医療を指向した基礎・専門課程における講義と実習、5～6年次での実務実習などを通して、卒業に必要な単位数を全て取得すると薬剤師国家試験の受験資格が与えられる。入学定員は



前列右から4人目が中村先生、5人目が筆者、後列右から3人目が井上先生

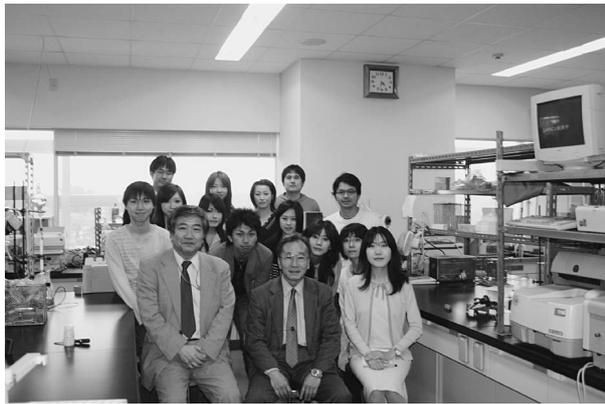
写真1 中村研究室の皆さん（薬学部15号館の前にて）

80名と私立大学の6年制学科の中では最少であり、より密度の濃い教育が受けられるようになっている。一方、生命創薬科学科は「先端創薬科学を担う研究者の養成」を目指しており、創薬を指向した基礎・専門課程を通じて講義と実習、卒業研究などの教育が行われている。ちなみに平成29年までの入学者に限り、大学卒業後、薬学の大学院を修了し、さらに医療薬学系科目や実務実習等の単位を修得して、薬学科（6年制）の卒業生と同等であると厚生労働大臣が個別に認めた場合には薬剤師国家試験も受験することができるとのことである。学科の入学定員は100名と私立大学の4年生学科では最も多くなっており、同大学が質の高い薬学研究者の育成に力を入れていることが窺える。

〈中村先生の紹介〉

既にご存知の方も多いと思われるが、ここで簡単に中村先生のご経歴を紹介する。中村 洋先生は、1968年に東京大学薬学部製薬化学科を卒業され、1970年に同大学院薬学系研究科修士課程を修了された後、博士課程在籍中の1971年に助手として採用された。「ピフィス菌の腸内増殖に関する基礎検討」というテーマで1974年に薬学博士の学位を取得され、同年より米国 National Institutes of Health (NIH) へ2年間留学された。1976年に帰国し復職された後、1986年に同学部助教授に就任した。1994年に東京理科大学薬学部教授として招聘され、現在に至っている。

その間、1979年に「生体成分の微量分析法の開発」で日本分析化学会奨励賞を、1998年には「生体成分・医薬品の高感度高選択的分析法」で日本分析化学会学会賞を受賞されている。また、本会の発展にも様々な分野に尽力されており、1998年に本会の副会長を、翌年には筆頭副会長として会長代行を務められ、2000年には関東支部長の職に携わられた。現在も本会の液体クロマトグラフィー研究懇談会委員長、会員拡充委員会委員長、産官学連携委員会委員長を務められている。



前列中央が中村先生、左側が小池研究員、右側が筆者
写真2 中村研究室の皆さん（実験室にて）

〈研究室の概要〉

中村研究室は、研究室が講座制を取っていた頃の薬品分析化学研究室が前身であり、1996年に研究室制へ移行した際に、現在の呼称になった。現在の研究室の構成は教授1名、助教1名、大学院修士6名、4年生7名の計15名である（写真1、写真2）。今年の3月までは佐野明先生が助教を務められていたが、4月に講師に昇進され、佐野研究室として独立された。そこで、新しく井上明先生が今年度より助教を務められている。

ここで、井上先生のご経歴について簡単に述べる。井上明先生は、2003年に東京理科大学薬学部製薬学科を卒業され、修士課程を経て、今年3月に同大学院薬学研究科の博士課程を修了された。この間、先生は、理化学研究所の前田バイオ工学研究室で、PDMSマイクロチップ電気泳動装置の作製、開発や同装置を用いた遺伝子診断法の開発に関する研究に従事され、「マイクロチップアフィニティー電気泳動を用いた遺伝子診断法に関する研究」で薬学博士の学位を取得された。私達が中村研究室を訪問した際は、助教になられて、約1か月ということで、スーツ姿にも初々しさが感じられた。しかし、研究のことに話が及ぶと、これまで携ってきた研究内容や今後の抱負について熱心にご説明くださり、今後のご活躍が非常に楽しみである。

研究室に話を戻すと、中村先生に教育方針について伺ったところ、研究も重要であるが、挨拶や敬語の使い方といった基本的な礼儀作法など社会へ出るためのトレーニングも重視しているとのこと。筆者も社会に出てから、挨拶など基本的なマナーの大切さを痛感しているところであり、学生時代にこの辺りのことをきちんと指導してもらえると中村研究室の学生さんは幸せであると感じた。

それでは、研究についての話に移ろう。今回の研究室訪問で最も驚いたことは、研究室の学生さんが4年生も含めて、自分で研究テーマを設定しているということである。普通、学生は研究室の研究テーマに関連した与えられた研究を進めて行く。しかし中村研究室では4年生の場合、5月中旬までに自分の卒業研究のテーマを決めて、6月から研究に着手する。「自分が決めたテ

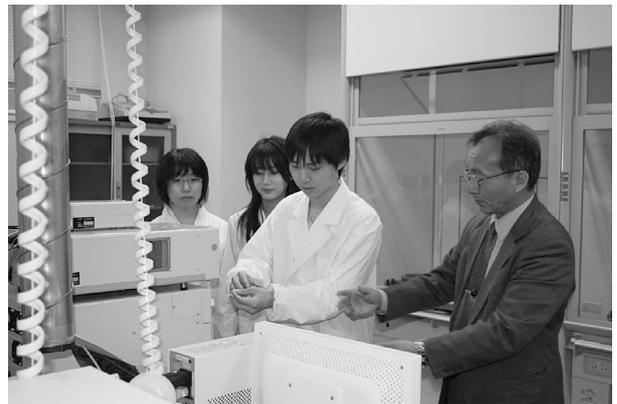


写真3 分析科学センターで4年生を指導する中村先生（右）

マだから、途中で投げ出す訳にはいかないでしょう」と中村先生がほくそ笑む。しかし、研究の仕事の中で最も難しいと思われる研究テーマの設定という課題に対して、当の学生さんはどのように感じているのか、実際に研究室に入ったばかりの4年生の学生さんに質問してみた。すると、大半の学生さんが、自分が決めたテーマで研究ができる、自分で考える力が身に付くという理由で中村研究室を希望したとのこと。中村研究室には、自主性のある頼もしい学生さんが集まってきているようである。実際に今までの学生さんがどのような研究テーマを設定しているのかをみると、新規美白成分や発毛阻害物質の探索、花粉症に関する分析化学的研究やD-アミノ酸による生物系統樹解析などバラエティに富んでいることが分かる。学生さんが設定した様々な研究テーマに対応する中村先生のご苦勞も並大抵ではないと思われる。当初は数年程度を目途に始めた「学生に研究テーマを設定させる」というこの試みは、かれこれ10年以上も続いているという（写真3）。

〈おわりに〉

研究室の学生さん達に中村先生に対する印象を伺ったところ、「話題が豊富で面白い先生」とのこと。研究室の志望理由に、中村先生の人柄を挙げた学生さんもいた。中村先生の明るく気さくな性格を反映してか、研究室の学生さんは皆、明るく、「雰囲気の良い研究室なんですよ」と嬉しそうに話してくれた。研究室訪問の際に、中村先生から卒業研究を始める4年生向けの心得を書いた文章をいただいたが、その中で先生は研究を「知的好奇心を満足させてくれる楽しいゲーム」と定義付けられていた。先生のこのような考え方と自分で研究テーマを設定できるという自由度の高さが、研究室の雰囲気の良さにつながっているのかもしれないと感じた。4月から新しく井上先生を迎えて、今後、研究室のますますの発展が楽しみである。

最後に、お忙しい中、研究室訪問にご協力いただいた中村先生、井上先生と研究室の学生の皆さんに、この場を借りて御礼申し上げます。また、一緒に研究室を訪問していただいた小池氏に感謝申し上げます。

〔東京都健康安全研究センター 坂本美穂〕